

実践倫理

「武士道の神髄」——とりもどそう大和心——

野木大義





# はじめに

## とりもどそう大和心

昭和二十年の敗戦後、日本はそれまでの日本人としての指導理念や道德規範が全て否定され、日本の過去は全て間違いであったという自己否定を日本自身がしてしまったのである。つまり連合軍（アメリカ）の絶対に使用してはならない原子爆弾をこともあろうに民間人を対象とした広島、長崎に投下した現実直面して、二度有ることは三度有ると信じ日本人が「トラウマ」になつてしまったと云つても過言ではないのであります。

これが為、現今の日本は、かつてない精神的退廃は極に達している。つまり政治不信、青少年犯罪の続発、日本はかつて世界に誇る安全な国という安全神話が根底から崩れ去つた犯罪の数々、警察の国民の信頼を裏切る不祥事（暴対法に対する警対法が必要ではないか）、我が国の根幹に関わる事件や問題が続々と発生していく中で、我々日本人は日本人としての確固とした方針がとれず、右往左往する実に情ない状態になっているのが現状なのであります。

まさに、日本の今そこにある危機であり、祖先から継承した伝統、文化を守り育て、次世代に伝えなければならない責務が我々にはある筈です。今こそ日本人の心「大和心」を取り戻さなければならぬのであります。

そこで我が日本民族の長い歴史の進展と共に磨かれ研がれて培つた精神「武士道」の再構築こそが急務であると思われる。

本年は奇しくも日露戦争（日本海々戦）大勝利一〇〇年にあたり、当時世界中に小国日本の存在を認識させたことを忘れてはならない、諸外国の識者が等しくその因由をいぶかつた時、新渡戸稲造は英文にて「武士道」を著して、その疑問を解いたのである。わが国「武士道」こそは実に日本の国運発展の原動力であつたといつても過言でないのである。

私は今こそ繰り返して言いたい日本人に必要な認識は碩学巨星の武士道論を学ぶことであると。ここにあって掲載し日本再生の糧としたい。

平成十七年三月

野 木 大 義

# 武士の起源と武士道

文学博士 渡邊世祐

武士という特殊な階級が生れてから發揮された武士道の尊い実例を挙げて、武士道發達のすがたを眺めてみたい為に本篇を採った。本篇は文学博士渡邊世祐氏が「武将と武士道」として述べられたものであるが、正に武士の起源時代の武士道を述べられたもので主従関係へ移動してゆく時代の武士道である。氏には外に「武蔵武士」の名著がある。

# 武士の起源と武士道

文学博士 渡 邊 世 祐

## 一

武士道は我が民族固有の精神に基礎を有するものであるが、古代の簡單なる社会にありては、皇室を戴いて、これに忠誠を致すという根本精神以外には、ただ漠然として具体化していなかった。それが時代を経て、幾多の変遷に遭遇し、漸次に一種の道德律を形成し、多くの洗練によりて確固たるものとなり、我が特有の具体的道德律となったのである。それは中世以後、武士の階級が結成せられてからのことである。それが恰も武士特有の道德律であるかのように解せられて、武士道と呼ばれた。従つて武士道は、我が固有の道德たる皇室中心の精神に基いて、忠孝を第一として起り、やがて主従の義が中心觀念となった。この主従の義は、所領授受という利害關係で結ばれたが、主人は身を以て家臣從属を庇護し、家臣從属は主人のために利害生死を外にして尽した。そこで主従一体という觀念を生じ、互に武士道を磨いた。武士道を磨くには、武芸に励みて文弱の弊を斥け、名譽を尊び廉恥を重んじた。そして平素から質素儉約し、有時の備えをなすに力めた。その修養のために、學問を修めて心膽を練り、強暴を斥けて孤弱を恤れみ、他人の難に赴くを意としなかった。かくて武士道は發達したのである。

されば武士道の徳目として考うるに足るべきものは、(一) 忠孝を第一とし、(二) 廉恥を重んじ、(三) 名利を離れて義勇を励み、(四) 強暴を挫いて孤弱を扶け、(五) 自己の責務を完全に尽すというのであった。これ等の徳目に伴う幾多の道德があるのであるが、それはこれ等を充実するために自然に起つたものである。即ち質実強剛であつても文雅の才を有し、情を知ること必要であり、人を救ふことは心掛けても人の己を救はんことは求めず、武名を揚げ家名を現すに努め、専ら自己の責務を尽すことを考え、俯仰天地に愧じぬことが大切であつたのである。かく説き来れば、武士道は最も犠牲的精神を必要とし、難に臨んで死を畏れぬことが大切であり、一命を賭して君に仕え、事に当らなければならなかつたのである。

## 二

武士道は武士階級の結成せられてからの道德であるが、武士の起源は多く東国にあったから、東国の武将が活躍した前九年の役や後三年の役に、その萌芽と認められる実例を求めることが出来る。

源頼信が上野守だった時、その乳母の子藤原親孝が、あるとき盗人を捕えて縛って置いた。盗人は縛を解いて逃れようとしたが、容易に逃げる方法がなかったので、親孝の一人の幼児を質に取って物置小屋に入り、刃をその腹に当てて寄らば刺さんとした。親孝はそれを聞いて駈けつけたが、如何ともなし得ず、あわて惑い、泣いて頼信に訴えた時、頼信は呟いて「道理とは思われるけど、かかることにて泣くべきかは、たかが小童一人、突き殺さすがよい、さようの心ありてこそ、つわものの道は立つべきぞ、身を思わず妻子を思わぬのが勇士の本分である」と言った。

武蔵の地は利根川の流域であって、大平原を形成していたから、武士の発生には好適地であった。嵯峨天皇（第五十二代）の皇子に、源姓を賜わって、この地方に下って国守となり、子孫土着したものが多かった。されば河原左大臣融よおるの孫、大納言昇のぼるの子は武蔵野守となつて下り、箕田郷（鴨巢町附近）を開墾して箕田氏と称した。その子宛あつるは箕田源次と称して弓馬の術に秀で家人郎従を多く養うた。又 桓武天皇の御孫高望王たかもちも平姓を賜わり、その子は関東に下って各地の守となった。その中の五男良文よしふみは武蔵守となつて、村岡（熊谷町附近）の地に土着し、村岡五郎と称して多くの家人郎従を養うて武勇の誉が高かった。かく源次と五郎は共に武名があったので、中傷するものがあつて、五郎に、「源次は常に五郎は我が敵でないといった」と話し、更に同じように源次にも告げたので、両者ともに憤り、「さらば野に出でて互に勝敗を決せん」と会戦の日を約した。

その日となれば、両者は各兵五六百騎を率いて相会した。そこで五郎は源次に「兵を率いて戦うは興なし、ただ単騎二人のみ闘うて勝敗を決せん」と話した。源次もこれを諾し、郎従にはその主を援くるなく、闘死せば屍を収めて退くべきを命じ、だた一騎、群を離れて立ち向つた。

かくて源次は雁股かりまたの矢を番えて立ち、五郎はまた強弓の真中を持って出で、五郎が先ず射れば、源次は巧にこれを避け、源次が射れば五郎これを外し、互に射ることも避くることも巧であつた。かくて数十合たたかったが、勝敗が決しなかつたので、終に引き分れた。これから、両者は、互に親しくなつて扶け合つた。これは互に武名を傷けざらんことを虞れて闘つたからであるが、か



かる達引は、誠に武将の面目のために行われたものである。

後三年の役に、源義家が、清原武衡と家衡を金沢の柵に攻めた時に、義家の将士は多く疵をこうむった。その中に、相模の住人鎌倉権五郎景政があった。景政は年齢わずかに十六であったが、大軍の前に奮迅して戦うたので、征矢にて右の目を射られ、首をも射貫かれて、兜の鉢付の板に射付けられた。その痛手にも屈せず、景政はその矢を折りかけて、却って射返して敵を斃した。かくて陣所に帰り、手負たりとて仰向けに伏していた。

然るに三浦平太郎為次とて名高い武士があったが、同郷の親しみて、景政の苦しみを早く去らしめんとし、その顔をふまえて矢を脱こうとした。その時に、景政は伏しながら刀を抜いて、為次を下から刺そうとした。為次は驚いて、こは如何にと尋ねたところ、景政は、弓箭にあたりて死するは武士の面目である。然るに、生きながら足にて顔を踏まるるは恥であるから、新に敵として切り死にせんとしたと答えた。そこで為次は膝をかがめ、礼儀正しくして顔をおさえ、やがて矢を抜きはなった。これは如何に危急に逼っても、武士が如何にその面目を重んじたかを物語るものであって、武名を尊び、生命を省みない心の美しさを現わしたものである。

前九年の役に主将であった源頼義が、その将士と共に艱難を共にしたことは有名な話であるが、康平五年八月に、陸奥小松の柵に、安倍貞任、宗任等を攻めた時に、貞任等が頼義の陣に殺到した。頼義の軍にあった清原武則は、頼義の誼に感じて、生命を鴻毛の軽きに比し、敵に向かって死するとも敵を背にしては生きじと覚悟して戦い、頼義の子義家、義綱等と共に奮戦して貞任等の具を破り、磐井川に追撃し、厨川の柵に逐うて大いに勝った。かくて頼義は、その陣営に還って将士を餐し、且つ親ら軍中を廻って負傷を治療した。将士はみな感激して、身は恩に使われ、命は義によって軽し、頼義のために死するも毫も恨みなしといひ難した。かく将士が恩に感じたので、容易に剽悍な貞任等の軍を破るを得た。その鳥海の柵を奪取したときに、頼義は武則を顧みて、柵の名は夙に聞いたが、その体を見ることが出来なかった。今日、卿の忠節により初めて見ることが出来たが、卿が予の顔色を見るは如何にと問うた。そこで武則は、足下 皇室のために忠節を擢んで、風に櫛り雨に沐し、甲冑に虱を生ずるも顧みず、軍事に苦慮する十余年、天地その忠節を助け、将士その志に感じ、賊を潰走せしめた。愚臣はただ鞭を擁して従うのみであって何等の功勲もない。但し足下の容貌を見るに白髪は半黒となった。若し更に厨川の柵を破り、貞任の首を得れば、鬢髪悉く黒くなり、形容

肥満せんと答えた。これを聞いて頼義は、これ卿が大軍を率いて堅陣を破ったから予の忠節を全うしたのである。その功勲は卿にあって予の白髪もために黒に返らんと告げた。この主従応酬の情は、実によく武将とその配下との真情を流露したものであって、武将の謙讓と配下の礼儀とは共に併せ伝うべきものであった。

陸奥に平永衡という武士があつたが、陸奥守藤原澄任に仕えて郎従となり、厚く眷顧を蒙り、登用せられて一群を領する程となつた。然るに安倍頼時が、勢を得るに及び、その娘を娶つて婿となり、澄任に背いてこれと戦うた。それから前九年の役となり、源頼義が陸奥守兼鎮守府將軍となつて、板東の武将を率いて頼時を征した時に、永衡は逸早くも親しみを捨てて頼時に背き、頼義の軍に馳せ参じた。それで頼義は永衡が主従の義を猥りにするのを憤つて、永衡の兵を攻め、主なる郎党四人と共に永衡の不義不忠と、その操守することの堅からざるを責め、これ等を斬つて主従の義を守るべきの範を示した。

前九年の役が終つて、鎮守府將軍源頼義は、安倍貞任、重任と藤原経清等三人の首級を京都に上らせた。貞任の首級は、その下人を担夫として運ばしめた。あまりに髪が乱れているので、首級の髪を梳らんとしたが、櫛がなかったので、私用の櫛を用いしめた。その時に下人は「吾主存生の時には、これを仰ぐこと高天の如し、然るに図らずも今わが垢れたる櫛にて恭くも、その髪を梳ることとなつた。」と悲嘆した。これを見、これを聞いた頼義の従者は、みな落涙し、下人の担夫すら主従としての義を知る、と深く感泣し、深く同情した。

### 三

鎌倉時代は武家政治が全盛であつたので、政治はもちろん社会組織の上に於ても、武士が中心であり、武士道は特にこの時代に発達した。武家政治を創めた源頼朝は、藤原氏の勢力失墜、平氏滅亡の跡に省みて、武士をして上方の淫靡、遊蕩の風に親しむを避けしめ、士風を練つて質実剛健ならしめた。そして頼朝は深く皇室に対する大義を重んじ、我が国体の本義に即して敬神の念に厚かつた。また頼朝は主従の義を大切として、武士階級の統制を保ち、身を以て将士を率い、勤儉尚武の範を垂れ、謙讓の徳を示して武士道を奨励した。この方針は鎌倉時代を通じて歴代継承せられたので、上下の間に武士道の精神は行き亘つた。特にこの時代は、多くの高僧が現われたので、武士はその影響によって思想的に幾多の洗練を受けて、武士道は一そう深遠の意義を有する



ものとなった。

源頼朝は武家政治の創立者であるが、頼朝の創めた幕府は、武士を統御して天下を統一したのであって、皇室に対し尊崇の念厚く、忠勤を励んだことは相当に深かったのである。その志の一端として見るべきものに、頼朝が俊乗坊重源ちようぜんに宛てた自筆の書状がある。重源は勸進聖かんじんひじりとして奈良東大寺の大仏再興を計画し、寢食を忘れて奔走したのであるが、頼朝の尽力を仰ぐことが多かったので、「君」の力に憑よらなければならぬと頼んだのである。これに対して頼朝は、早速自筆で返事し、その末に「かねて御消息の君御助けならずばと候は、もし頼朝のことに候か、然れば君の字その恐れ候ことなり、自今以後も更に不可有候者也」と書いている。これは、「君」という字は、天皇に対し奉りて用ゆべきものであるのに、重源が頼朝に対して用いたのは、恐れあることであるから、今後は決して使わぬようにと戒めたものである。これによっても頼朝の心のほどが知られ、我が民族に普遍する根本精神は決して没却していなかったのである。されば頼朝は 皇居の御修理をも申し出で、禁裡、仙洞、大内の修理を計画した。そして、これに要する費用は頼朝自身の知行国に課せられんことを請うた。朝廷では皇居の修理その他、親王及び 後白河法皇御所の修築が出来た。その大内の修理は、他の修築の後で、相応に重い負担の時であったが、頼朝は法皇に「朝家御大事と云い、御所中の雑事と云い、何ヶたび候と雖も、頼朝こそ勤仕すべき事にて候えば、愚力の及び候わん程は、奔走せしむべく候」と奉答している。これは朝廷の御大事、宮中の雑事であっても、幾度でも頼朝は力の及ぶ限り勤仕すべきことを申し出たものであって、頼朝はかかる勤仕を無上の光栄として喜んだのである。

また頼朝は、源平の戦争で頽廢諸国の神社仏閣の修理を奏請し、経費を助成した。伊勢大神宮、石清水八幡宮、宇佐八幡宮、住吉、鹿島等の諸社及び仏寺の造宮が出来たのも、頼朝の尽力多きにあったのである。

頼朝に従うた鎌倉武士には、節義、廉直のほまれを残したものが数多くあるが、その中でも、畠山重忠は武士道の花と謳われるほどの立派な人物であった。重忠は武勇絶倫の士であって、宇治川の戦、一谷の戦等に勇名を馳せたことは、よく世に知られているのであるが、つぎに彼が清廉潔白であった事を述べて見ようと思う。重忠が恩賞地として宛て行われた伊勢員弁郡沼田御厨の地頭職は、重忠が鎌倉にいたので、その眼代、即ち代官として真正を遣わして、これを委していた。然るに真正が私曲を行つたので、御厨のこととして伊勢大神宮から、これを糺すべきようにと鎌倉幕府に訴えた。そこで頼朝は正光を遣わして、その実否を調べさし

たところが真正の私曲が明となった。日頃から敬神の念の強かった頼朝は、嚴命を下し、千葉胤正をして重忠をその第に幽し、その所領をも没収せしめた。重忠も大神宮のことなれば罪に服し、恐懼おくところを知らず、謹慎して絶食した。かくて一語も発しないで七日に及んだ。重忠の顔色いちじるしく憔悴したので、胤正は折角の功臣を喪うことを恐れ、状を具して頼朝に赦免を請うた。頼朝もその行動に感じて、早速に幕府に召出して、これを免した。その退去の際に重忠は同僚に「真恩に浴して地頭職を給わる時には眼代の器量を選ばなければならぬ。若し適當の人がなければ地頭職を返上すべし、重忠は年来精鍊を思い潔白を志したにもかかわらず、真正の私曲さねまがによりて思わぬ恥辱を受けた」と話した。頼朝も重忠の忠誠を思い所領を復し、沼田御厨だけを取上げた。それから重忠は、その本国武蔵菅谷館にありて謹慎していた。

平素、重忠を喜ばなかった侍所の別当梶原景時は、それを好い機会として頼朝に讒し、重忠は重科がないのに所領を召放ち、その功績を省みられなかったのを憤り、潜かに反逆を企てていると説いた。そこで頼朝も心動き、小山四郎朝政、結城朝光、下川邊行平、和田義盛等を召して評議した。その時に朝密は、重忠は清廉の士である。偶々眼代の私曲に坐して罪に伏し、神宮の罪を獲たとて謹慎絶食するに至ったので、怨など抱くものにあらず、願わくば使を遣して実否を尋ねられたしと請うた。そこで頼朝は重忠の弓馬の友である行平を遣し、鎌倉に召還らしめることとした。行平が、重忠を館に訪うて、事情を語ったところ、重忠痛く嘆き、重忠の志は二品殿の知しめす所である、何とて反逆などすべき、これ讒者の所為で必定我を殺さんとして御身を遣せしなるべし、かかる末世に逢うも宿業なれば、他人の手にかからじとて、腰刀をとりて自殺せんとした。行平は驚いて、これを抑え止め、御身を殺す心ならば、などで自分を遣わさるべきいわれなしと説いて、駒を並べて鎌倉に馳せ参じた。

重忠は侍所に至り、その別当である景時に就いて、頼朝にその志を陳ぜしめた。そこで景時は反逆の志なきことを神明に誓い起請文に認めて出すべしと命じた。重忠は武士は武功に誇り、民衆の財宝を横領したといわれるれば恥とすべきも、反逆を企つると噂さるるは却て面目である。初めから二心なきは二品殿の知しめすところである。起請文を用いるは奸者に対する場合なりと弁じ、頼朝に披露せられたいと説いた。景時止むなくその趣を頼朝に取次いだので、頼朝は重忠の志を憐み、これを召し、行平をも同坐せしめ、世間のことも物語り、一言も反逆などのことに及ばず、親しく睦じげに語り合われたのであった。これ重忠が平素武士の本領を守り、忠誠で清廉潔白であったから、頼朝を感じしめたので、至誠天地を動かしたと言わなければならぬ。



葛西清重は、武蔵権守となつた清光の三子である。三郎と称した。祖先から累代源氏に仕えていたが、清重は武蔵葛西を領して氏とした。葛西は今の東京府南葛飾郡の地であつた。頼朝が兵を安房に起し、下総に入り、やがて武蔵に進み、隅田宿に至つた。この時、関東にあつた恩顧の武士は皆馳せ参じたが、清重も父清光と共に頼朝に謁して麾下に属した。然るに先に頼朝が伊豆石橋山で大庭景親と戦つた時に景親に属した江戸重長、河越重頼等も來つた。そこで頼朝は重長が景親に属したのを憤つて、その所領を没収して清重に与えた。清重はこれを堅く辞し、恩賞によりて所領を増すは武士の面目であるが、一族であり、且つ一旦の恩義によりて平家に従つた重長の所領を賜わるは予ての素志に違ふ所である。自分としては旧領にて足る。若し重長に真に罪あらば、他人に賜わりたしと答えて辞退した。そこで頼朝は、清重が命を奉ぜぬものとして、その旧領をも没収することとした。清重は従容として命を奉じ、この事によって罪せられるは運の極みであつて、力の及ばざるところである。武士は高潔でなければならぬ。而も受くべからざるを受くは義にあらざれば、何としても重長の所領は辞退仕ると凜然と答えた。頼朝もその態度と道理正しきに感じて、重長の罪を宥して安堵せしめた。清重の情誼に富める詞は、正に武士道の美談として伝ふべきものであつた。

#### 四

武家政治の全盛時代に、武士階級によりて形成せられ、觀念的となつた武士の道德律は、武士道として規範を多く後世に垂れた。これが鎌倉幕府で、北条泰時の定めた貞永式目五十一ヶ条によりて一層形式附けられて一種の堅実なる不文律となつた。これから以後、室町時代は元より戦国時代から江戸時代にかけて、武士道は益々洗練せられて細かいものとなつたが、その精神は武士の間に継承せられて一層堅固となつた。戦国時代に群雄が割拠した際でも、上杉謙信、武田信玄、織田信長、毛利元就等により、日常に実行された行動は、範例をみな鎌倉時代及びその以前の武士の行動に採つたのであつた。それから江戸時代となり、文芸復興により儒學の影響を受け、国学の發達に伴うて思想が細かく練られるに至つて、なお進んで武士道は普及するに至つた。そして武士は勿論これに背くを恥辱としたのである。その影響を受けて、単に武士のみならず、他の農工商の一般民衆も、階級の如何を問わず、職業的區別を超越して、武士道に外れることを絶大の恥辱と考えるようになった。かくして武士道は具體的となり、普遍的となり、国民道德となつて、我が民族固有の道德に還元したのである。

# 吉田松陰の武士道

海軍大佐 廣瀬 豊

山鹿素行の武士道は吉田松陰に至って大成したと言われる。吉田松陰の武士道は明治維新を招来し、明治維新の英雄を生んだのであって、今に世人を感化すること深いものがあるのである。廣瀬豊氏は海軍大佐であって、吉田松陰研究の第一人者である。吉田松陰全集は氏の編纂するところである。本文は氏の吉田松陰の武士道と士規七則講話等から採録したものであるが、けだし、吉田松陰の武士道を最も簡明に捉えることの出来るものであろう。

# 吉田松陰の武士道

海軍大佐 廣瀬 豊

## 一

吉田松陰は長州毛利藩杉百合之助の次男であつて、天保元年、萩の郊外松本村に生れた。幼時は虎之助と云つた。後六歳の時に、叔父吉田大助の養子となり名を大次郎と改めた。その後二十三歳の時過失ありて御咎の身となつたおり松次郎と改めた。後また感ずるところありて寅次郎と改名した。本名は矩方のりかたで矩は吉田家伝来の名字である。字は義郷または子義と云つた。しかし以上の名称は親の付けたものが多く、自分で意義をはっきりと自覺して付けたものではない。ところが綽名や号になると色々の意味を有っている。友人のつけた綽名には第一に仙人、次に翁というのがある。風貌の仙骨稜々たることを示し、一面老成人らしい落付もあつたと見える。その次は猪牙、これは向う見ずの意味らしい。自分も向う見ずを自覺して居つたと見えて、安政二年の暮に「猪の如し」と自ら云つた事もある。ネルソンにもこんな綽名があつた。由来、英雄にはこれがなくては物にならぬ。その次は自分でつけた号で、世間に最もよく知られているのは松陰である。これは嘉永五年頃から用いたもので、初は松陰蓬頭生などと書いてある。蓬頭生は、蓬頭乱髪で身なりに頓着しない時代を物語るのである。この蓬頭生は何時しか廃止されて、松陰だけが長く使用された。また別に二十一回猛士の号がある。これは彼が二十五歳のとき自ら撰んだものである。その説に夢に神人來りて汝は二十一回猛士だと云つた。考えて見れば、これは中々意味が深い。自分の実家の杉という姓は、字画を分解すれば、十八彡で二十一だ。また吉田の方も、十一ロ十口で、ロと口とは回となる。故にこれも二十一回だ。また自分の名は寅すなわち虎、虎は元来猛烈なものである。然るに自分は性来弱くて臆病だから、大事を為すに足らぬ。それ故に今神の御告によつて、汝は猛虎の如くなるべしと示されたのであらう。彼は元来迷信嫌いで加持祈祷の如きは好まぬ性質であるには拘わらず、この事は深く信じて爾後始終これを回想し、この号を常用して志氣発憤の源泉としたということは、寧ろ不思議な程であつた。

彼の養家吉田家は代々山鹿流兵学の師範の家であつたが、この吉田家が山鹿流兵学の師範であつたことは、松陰の一生に大なる



影響を与えた原因で、これが奇縁となり幼より山鹿素行の著書に親しみ、遂には山鹿学統の継承者を以て自ら任ずるに至ったものである。実に彼は素行より第十代目の学孫に相当している。十一歳の時、藩主毛利義親の御前で家学武教全書の講義をなし、二十歳まで兵学の研究を積み、一方では藩校明倫館に出て門弟を教え、天才的青年師範の令名を轟かした。後にロシアが北辺に出没し米船がしばしば津軽海峡を通過するので、この方面を研究しようと決心し、友人と相談して十二月十四日義士討入の記念日に江戸出発と決めた。ところが藩から旅行の許可は得たが通行券の下附が出発に間に合わない。しかし友人との約束は変更できない。一諾千金より重きは武士道だと、遂に断然藩邸を脱走した。脱走すれば士籍を奪われるに決っているけれども、武士道には代えられぬと覚悟の上のことであった。かくて水戸人と交って水戸学風に感じたり、米艦に連行を切望し果されず自首して野山獄に下った。出獄後安政三年秋頃、近親の人々に武教全書を講義した。それが、武教全書講録となって遺っている。これが松下村塾である。その後再び獄に下り安政六年、刑場の露と消えたのである。

親思ふ心にまさる親ごゝろけふの音づれ何ときくらん  
身はたとへ武蔵の述べに朽ちぬとも留置かまし大和魂

## 二

武士道の基本精神は、いわゆる上古伝来の民族精神（荒魂<sup>あらみたま</sup>）であって、それが武人全盛の鎌倉時代から、著しい効用を発揮するに至ったのである。ただ戦乱の時代には、思想もまた群雄割拠であったが、徳川も三代になって漸く落ち着いてから、前代よりの精神的遺物を整理し、これに理論づけを行った人が山鹿素行である。それから種々の学者が出て、次第に整頓して幕末に及んだのである。しかし整頓がやがて形式に墮し遂にその精神を喪い、実行がそれに添わないことになるのは、何事にも共通な経路である。而して又そういう時には、いつも煩瑣な形式を破って、古の精神に復るのが、これまた正に当然の傾向であろう。徳川時代の武士道も、矢張りこうした経過を取った。松陰の生きた時代は、その建設への破壊時代なのである。

「武士の習」を理論化するに当っては、その基礎原理を、何れの論理学説より取るかによって、多少の相違がある。例えば儒教学者は儒教の立場から、国学者は国学の立場から、また仏教者は仏教の立場から見て、組織を立て説明を与えている。松陰の武士

道論に最も關係の深い山鹿素行の武士道論は素行の儒教説から出た倫理説を土台としている。故に今日の人から見れば、大たい著しく支那式である。ただ素行にありては、他の儒教學者に比し、日本古典に精通し、且つ晩年に至りては、国體精神の自覺が強いために、比較的に支那思想を脱却した跡が著しいけれども、それでも松陰ほどには行かなかった。就中、武教小学や、語類の臣道、士道、士談の如きは、未だ十分に老熟していない時代の作であるから無理もないが、これは、素行が如何に天才であっても、時代を超越しきるわけには參らない証拠である。

松陰の武士道論は、大たい先師素行の衣鉢を受けている。のみならず、松陰に於て最も尊敬すべきは、學者たると同時に実行者であつたこと、素行魂の再生であつたことである。殊にまた特筆大書を要する点は、學説としても、また実行に於ても、確かに素行に一步を進めている点である。この点は流石に、山鹿學統掉尾の一偉才たるに恥じないと言つてよい。

### 三

武士道の根本精神は、實に尊皇思想でなければならぬ。しかしながら、この理は上古王政の時代に於ては事實であり得たが、鎌倉時代以後に於ては、尊皇思想とは關係が薄いというよりも、むしろそれを縮小したような主從關係に移つた為に、本来の面目を失つたのである。けれども、範圍が小なるだけにまとまりがよく、且つ極めて素朴的に、思う存分に精神の流露が出来たから、その小範圍に於ける民族精神は、可なりに培養し鍛鍊されたことは疑がない。故に一たび本来の面目を自覺するや、その民族精神が、そのまま十分の効力を發揮することが出来た。

徳川時代の武士道の大體の傾向は、やはりその小範圍を出てはいないが、これを思想的に研究し、國體に基いて本来の面目を考うる者にとっては、「これではならぬ」と考えていたのである。山鹿素行の如きは、正にその一人であつた。然し、それは時代の反抗者として睨まれる患があり、何か一大事變が起らなければ、公然と發表することは困難であつたに違いない。然らざれば余ほど曖昧な態度で發表しなければならなかつた。當時の學者は多くこの曖昧學者であつた。然るに松陰は、幸にも幕末變動の時機に際しているために、始めは徐々として、後には大びらに、本来の面目を大声叱呼することが出来たのである。

## 四

士規七則は、武士道の憲法七ヶ条という意味である。この七則は文も意も実によく出来て居って、古来これほど簡潔にして要領のよい武士道の憲法はないと言われている。大体は、序文に、これを書いた理由を述べ、本文の第一条には人の人たる道を、第二条には日本人の道を、第三、第四条には武士道の綱領を述べ、第五、第六、第七条には武士道の修養方法を説き、末尾に結語を附してある。

披繙冊子、嘉言如林、

冊子を披繙すれば、嘉言林の如く、

躍々迫人。顧人不読。

躍々として人に迫る。顧うに人読まず。

即読不行。苟読而行之

即ち読むとも行わず。苟に読みて之を行わば、

則雖千萬世不可得尽。

則ち千万世と雖も得て尽すべからず。

噫復何言、雖然有所知矣、

噫復何をか言わん。然りと雖も知る所あり、

不能不言、人之至情也。

言わざるに能わざるは人の至情なり。

古人言諸古、今我言諸今、

古人これを古に言い、今、我これを今に言う、

亦詎傷焉、作士規七則。

亦詎ぞ傷らん。士規七則を作る。

これは序文である。聖賢の書物を披き繙いて見れば、善い言葉が林の如く併んで居ってひしひしと吾々の胸に迫って来る。然るに世人はこのよい書物を読まぬらしい。よし読んだとしてもこれを実行しないようである。本当に読んでこれを実行したならば、千万年経っても尽きるものではない。それだから吾々は別に云う筆王はない訳である。然し知って居るところがあれば、言わずに居れぬのは人間の常である。それ故に古人も色々と言っているし、いま自分も亦何か言うても別に差支あるまいじゃないか、かようなわけで、この士規七則を作ったのである。

一、凡生為人、宜知人所<sub>三</sub>以

凡そ生れて人たれば、宜しく人の禽

異<sub>二</sub>於禽獸。蓋人有<sub>二</sub>五倫<sub>一</sub>

獸に異なる所以を知るべし。蓋し人

而君臣父子為<sub>二</sub>最大<sub>一</sub>。故

には五倫あり、而して君臣父子を最



人之所以為人、忠孝  
為本。

大なりと為す。故に人の人たる所以  
は忠孝を本と為す。

人と生れたならば、人と禽獸とはどこが違うのであるかを知らなければならぬ。それはいうまでもなく、人には五つの道があり、他の動物にはこれがないからである。その五つの道とは、君臣関係の道、親子関係の道、兄弟関係の道、夫婦関係の道、朋友関係の道、これである。而してその各々の道を、忠、孝、和、友、信と称する。この道は、いわゆる天の道であって人為的のものではない。尤もこれを発見したのは古来の聖賢で、幾万年の実験上、動かすべからざるものとなって来ているものである。その中で一番大切なものは忠と孝とである。何故かといえば忠孝二道を体得すれば、他の三道は、この忠孝から流出するものであるからである。つまり人の道は五つあるが、もとは二つであると言える。以上、一般人間としての道の説明である。

二、凡生皇国、宜知吾所以

凡そ、皇国に生れては、宜しく

尊於宇内。蓋 皇朝

吾が宇内に尊き所以を知るべし。

万葉一統、邦国士夫世

蓋し皇朝は万葉一統にして

襲祿位。人君養民、

邦国の士夫世々祿位を襲ぐ

以続祖業、臣民忠君、

人君民を養いて祖業を続きたまい、

以繼父志。君臣一体、

臣民君に忠にして父志を繼ぐ。君臣一体

忠孝一致、唯吾国為然。

忠孝一致なるは唯吾国を然りと為す。

凡そ日本人たる者は、日本の日本たる所以、即ちどこが日本の万国に対して優れて居るのかを知らねばならぬ。日本は上に万世一系の天皇が御出になり、御祖先の御遺業を継ぎ給うて臣民を養い下され、臣民亦その祖先の志をうけて君に忠義を尽す。これ実に君臣一体忠孝一致の理想が実現されたもので、こんな国は世界中で吾が日本だけである。

この条項は、吾が国体を説き、日本人としての道を説いたもので、松陰の最も力説した点である。元来すべての道徳は元は一つの道理であるから、その道徳の徳目が互に一致すべきもので、反対すべきものではない。然るに国の性質によりては忠と孝とが必ずしも互に一致することが出来難いものがある。例えば親が忠義を尽した君主（或は大統領）を、子または孫が君主（或は大統領）

としない事がある。いな君主としないばかりか、これを敵視する場合がある。そうなれば忠と孝とは必ず一致するとは決して居ないわけである。忠孝すでに一致しない以上は、忠と友、和、信の関係も亦、一致できない。かかる国は道徳が完全に行われ難い国である。

然るに日本は、神代の昔より今日まで、君臣ともに祖先を同じうする家族的国家であるから、忠も孝も全然同一である。故に臣民はただ忠であれば自然に孝にも叶うこととなる。支那の古聖賢の如きは、忠孝一致を理想として説いたけれども、この理想は支那に於ては一度も実現されなかった。独り日本に於てのみ実行されつつある。その実行の意志の堅固なる事は、人類歴史上の驚異とされているのである。而してこの事実の淵源をなすものは何であるかと言え、実に「宝祚之隆、當與天壤無窮者矣」と仰せられた天照大神の御意志御神勅である。故にこの御神勅が日本たる所以である。否この御神勅が、そのまま日本なのである。而して御代々の天皇は、この御神勅をそのまま御伝え遊ばさる御方であるから、吾々臣民は如何なる事があっても、天皇の御命令に背いてはならない。日本臣民がこの信念さえ堅固ならば、日本は永久に栄えるのであらう。また仮令、天皇の命令に従った為に、万一形の上で日本が危いように見えても、それは已むを得ない。国の栄枯盛衰よりも、天皇の命令の方が重いと松陰は言っているのである。

### 三、士道莫大於義。

士の道は義より代なるは莫し。

因勇行、勇因義長。

義は勇に因って行われ、勇は義に因って長ず。

この条は、武士道の綱領は義と勇とであることを述べている。義とは即ち正義の意であって、人道に合することをいうのである。その正義の最高は忠義である。この正義を実行することは、時には容易でない場合がある。現に明治維新の時などは正義を誤ったり、或は正義と知っても実行を躊躇した人が少くない。また今日でも思想問題などに迷っている人があるのは、実行困難の一証拠である。何故に正義の実行がしかく容易でないかと言え、正義とは何であるかがよく分らないからである。若しよく分ったならば、実行せずに居られないのが当然である。故に実行に先だって予めよく研究して置くことが必要である。その研究は後に述べるように、聖賢の書を読んで古人の行跡をよく考え、嘉言善行の何たるかをよく理解し、咄嗟の事件に判断を誤らぬだけの用意が大切である。



しかし松陰は、単に理屈や知識上の理解のみを以て、最も大切なものとは見て居ない。却って人情上の理解を以て最も大切なものと見てゐる。但し、松陰のいう人情は最も純粋な情操であつて、結局は至誠と一致するものである。故に人情と義理とは究極に至れば一致するものであるから、仁義道德は左程むずかしいものではないと言つてゐる。

さて正義の何物たるかを理解したならば、これを実行するには勇氣が必要である。勇氣がなくては如何に正しいことでも行われない。特に武士は勇氣がなくては戦争という職分が務まらない。しからばその勇氣はどこから出るかといへば、正義の信仰から出る。この信仰いよいよ堅ければ、勇氣は愈々壮んである。かくして武士道の結局は正義の理解体得が基礎となつて居るわけで、「士の道は義より大なるは莫し」という所以は茲にある。

四、士行以質実不欺為　士の行は質実にして欺かざるを以て要と為し、

要、以巧詐文過為恥。　巧詐にして過を文るを以て恥と為す。

光明正大皆由是出。　光明正大皆是より出づ。

この条は武士道の実行方法を示してある。即ち武士の行は光（公に同じ）明正大であれと教えてある。つまり前条で義を知り勇を以てこれを実行する場合に、表から正々堂々とやれ、陰にかくれてやってはならぬというのである。かような習慣を養うにはまず正直が一番大切で、過を巧みに飾ることは悪いことである。

五、人不通古今、不師聖　人古今に通ぜず、聖賢を師とせざれば、

賢、則鄙夫而已。讀書　則ち鄙夫のみ、書を読みて尚友するは、

尚友君子之事也。　君子の事なり。

以下三条は、武士道の修養法を述べてある。その第一は讀書である。詳しく言えば古今の事績をよく心得て、聖賢を手本とせなければ、一鄙夫で君子とは言えぬ。ほんとうの君子となるには、書を読み、精神的に聖賢と交わる必要がある。かくの如くして始めて君子というべきである。君子とならねば本当の武士ではない。この場合、書とは聖賢の書、又は聖賢に関する書を指すのである。松陰は自ら非常なる讀書家であつて、万巻の書を読むことを以て自らも励まし、人にも勧めてゐる。故に松下村塾には、

自非讀萬巻書、安得為千秋人。

自<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>輕<sup>二</sup>己<sup>一</sup>、安<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>致<sup>二</sup>兆民安<sup>一</sup>。

万卷の書を読むにあらざるよりは、いづくぞ千秋の人たるを得ん。

一己の勞を輕んずるにあらざるよりは、いづくぞ兆民の安きを致すを得ん。

と書して掲げてあった。

六、成<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>達<sup>レ</sup>材、師<sup>レ</sup>恩<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>益<sup>レ</sup>居

德を成し材を達するには師恩友益多きに居る。

多<sup>レ</sup>焉。故<sup>レ</sup>君子<sup>レ</sup>慎<sup>二</sup>交友<sup>一</sup>。

故に君子は交友を慎む。

武士道修養の第二として交る友を択ぶべき事を述べてある。その第一は良師を得ることである。故に松陰は言っている。「妄に人の師となるべからず。又妄に人を師とすべからず。必ず真に教うべき事ありて師となり、真に学ぶべき事ありて師とすべし」と。その第二は良友を択ぶべき事である。松陰は以上の二つを世人に勧めたばかりでなく自信も亦、実行して居ったのである。即ち松陰の師は、若くしては玉本文之進、山田宇右衛門、山田亦介の如き、後には、森田節斎、佐久間象山の如き、何れも偉大なる人物であつたし、彼の親友は殆ど皆、御贈位にあずかっている位に立派な人々であつた。而して、その門人には授爵者、贈位者等、数うるに遑がない。これ択友その宜しきを得たからである。

七、死<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>已<sup>二</sup>四字、言<sup>レ</sup>簡<sup>レ</sup>義

死して後已むの四字は、言簡にして義該<sup>か</sup>ぬ。

該。堅<sup>レ</sup>忍<sup>レ</sup>果<sup>レ</sup>決、確<sup>レ</sup>乎<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可

堅忍果決確乎として拔べからざるものは

拔<sup>レ</sup>者、舍<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>術<sup>レ</sup>也。

是<sup>お</sup>を舍きて術なきなり。

これは修養の第三として、常に決死の覚悟でなくてはならぬという事である。かく決死の覚悟さえあれば、確乎不拔、遂に成功することが出来る。然し乍ら決死の覚悟とは、単に死にさえすればよいというのではない。死んでも足りないのであるが、生前は死ぬまでやるより方法がない。死後は魂となって尽すというので、松陰は楠公の故事に倣って七生報国を誓っているのである。

右士規七則、約為<sup>二</sup>三端<sup>一</sup>。

右士規七則、約して三端となす。

曰、立<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>万<sup>一</sup>事之源<sup>一</sup>、

曰く、志を立てて万事の源となし、

択<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>輔<sup>二</sup>仁義之行<sup>一</sup>、

交を択びて仁義の行を輔け、

読書以稽聖賢之訓。

書を読みて聖賢の訓を稽う。

士苟有<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>於<sup>一</sup>此、亦可<sup>三</sup>

士苟<sup>まこと</sup>に此に得ることあらば、

以為<sup>二</sup>成人<sup>一</sup>矣。

亦以て成人と為る可し。

## 二十一回猛士手録

結語または結論である。以上七ヶ条をまとめて見れば、三つとなる。即ち第一は立志である。立派な人間になり、立派な武士になり度いという理想を立てる事である。これが一番最初にして又最も重要なものである。この立志があつて初めて修養が起るのである。然るに世人はこの立志に深き注意を払わないから、修養が徹底しないのである。立志は仏教でいう發菩提心で仏になるという念願と同じである。儒教では成人になるの願いを胸に宿して精進する人を君子というのである。立派な武士とは即ちこの君子の事である。何人も雖もかかる立願なくして修養する事は出来ない。次には良友を択びてその輔けを受けること、又その次は読書である。以上の三箇条を徹底して行けば、一人前の立派な武士となる事が出来る。最後の二十一回猛士は、松陰の別号である。

## 五

松陰の武士道思想も、尊王思想と同様に、漸次に発達して来たものである。故に一躍して士規七則が出来たものでもなければ、安政二年二十六歳の士規七則を以て、松陰の武士道は終れりと申すわけにも参らない。しかし大体からみて、この七則ほど簡明に武士道の精髓をよく顯わした文章は他にあるまい。その点に於ては天下一品と云つてよい。先ず前提として武士道の倫理上の地位を明かにせんが為に、第一に人倫の大道を、次に日本道德の特質を述べ、而して本論として武士の本領を叙し、終りに武士道修養の方法と覚悟とを説いている。

第三条の士の道は云々のところを、藤井本の註には、

曾子曰く、自ら反みて縮<sup>なほ</sup>からずんば、褐<sup>かつかんぱく</sup>寛博と雖も吾<sup>お</sup>れ惴<sup>そ</sup>れざらんや、自ら反みて縮ければ、千万人と雖も吾れ往かん。

孟子曰く、我善く吾が浩然の気を養う。その氣たるや、至大至剛、直を以て養うて害することなければ、即ち天地の間に塞<sup>ふさ</sup>がる。その氣たるや義と道とに配す。これ無ければ餒<sup>う</sup>るなり。これ集義の生ずる所の者なり。義襲いてこれを取るに非ざるなり。



行心おこなひに慊こころらざるあれば即ち餒うう。

とある。即ちこれで見ると、義とは自ら正しいと信ずることである。その自信が勇気の根元であるとして居る。

次に第四条士の行は云々の註には、

孔子曰く、過ちて改めず、これを過と謂う。

孟子曰く、古の君子は過てば則ちこれを改む。今の君子は、過てば則ちこれに順う。古の君子はその過つや、日月の食の如し。民皆これを見る。その更るに及んでや、民皆これを仰ぐ。今の君子は豈徒にこれに従うのみならんや。又従つてこれが辞を為す。

子貢曰く、君子の過つや、人皆これを見る。更むるや人皆これを仰ぐ。

とある。要するに、正直即ち正を以て、武士道の要旨として居る。かくの如く、この士規七則に於ける武士道の要点は、正にある。「正しい」、これ実に日本民族の根本精神にして、苟も日本人である以上は、未だ曾てこの根本精神を離れたものは一人もあるまい。ただ或る場合には、何が正しいかの問題に疑問を生じたために、批難されたものはあるが、それは愚昧の致すところであつて、寧ろ憐れむべき痴漢と云わねばならぬ。

松陰は、この士規七則を以て、うまく出来たとは思つて居なかつたが、これに次いで武士道を語っているものは、講余余話である。その内の主なるものを挙げれば、第一は、武士の職分を知ることである。彼曰く、「今の士は名けて武士と云う。その本職は禍乱を平け、夷賊を攘うにあり……」と。第二は恥を知るべき事である。「抑々恥の一字は、本邦武士の常言にして、恥を知らざるほど恥なるはなし。武士の恥を知らざること、今日に至り極れり。武道を興さんとならば、まず恥の一字より興すべし」と。第三は利欲に恬淡なることである。「恒産なくして恒心あるものは、ただ士のみ能くすと為すと、この一句にて士道を悟るべし、諺に云う。武士は食わねど高楊子と、亦この意なり」と。以上は何れも武士道に必須の徳目に相違ないが、然し単に武士にのみ必要なものではない。然らば武士道の武士道たる所以は何れにありや、彼は之に答えて、「国の為に命を惜しまぬ事だ」と言っている。即ち「武士道を以て考うべし、武士たる所は国の為に命を惜しまぬ事なり、弓馬鉄砲の技芸に非ず、国の為に命さえ惜しまねば、技芸なしと云うとも武士なり、技芸ありと云うとも、国の為に命を惜しむは武士に非ずと……」と。この一言、只その一言は実に武士道の

精髓である。但し「然れども武士の武士たる所を知る上は、技芸もとより捨つべきに非ず、記誦詞章も亦かくの如し」と言つて、技術も決して輕んじては居ない。然しこれは精神が出来ての上だと云うのである。

武教全書講録は、講孟余話に引続いた著作である。この講録は、素行の武教小学の講義である。然しながら素行は、武教小学を武士道の教科書としたものであり、松陰の武士道も亦、これでその全体を示して居る。素行の武教小学を、これほど立派に説明したものは未だ世に出ないのである。その特色は、素行の国体論を一層強調したことと、武教小学が漢文なる為に、動もすれば支那思想に陥る患あるに反し、成るべく日本語、然も極めて適切な語を用いて、一そう日本精神を發揮した点である。例えば武教小学の行住座臥ただ敬を主とする事を述べた一節を講ずるに當つては、「敬は乃ち備なり、武士道にては是を覚悟と云う」の如き、或はまた子孫教戒に、「教戒の大本、武士道の眼目は、大丈夫となる事なり、士者以<sub>レ</sub>大丈夫<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>勇と云うこと、日夜朝暮に姑くも忘るべき事に非ず」などと言っている。なお素行は常に士道と言つて支那風であるが、松陰は時には士道とも言つたが、多くの場合、特に後年には武士道、武士道と大声叱呼これ力めて居る事は際立つて見えるのである。

安政六年の春、即ち彼が年三十の作で、この種の論としては最後のものに、「坐獄日録」がある。その冒頭には「吾幼にして漢籍にのみ浸淫して、尊き皇国の事には甚だ疎ければ事々に恥思う」と記されてある。いうまでもなく偽のない言葉は魂である。故に日本精神を述ぶるには矢張り日本語でなければ十分でない。然るに松陰にして尚漢文を過信した事も一つの見誤りで、それがこの頃になって、かかる嘆声を洩らさしめた原因であらう。士規七則などは、余程その点に注意しても、矢張り支那思想の束縛は免れない。特に注釈に至りては例を悉く漢籍に取っているほどで、遂々この嘆声となつたのであらう。而して、今や純粹の日本精神の立場に立つてみれば、武士道は矢張り「漢土天竺の臣道は吾知らず、皇国に於ては宝祚素より無窮なれば、臣道も亦無窮なることを深く思を留むべし」となり、「臣道いかにぞと問わば、天押日命のことだてに、海行かば水ずく屍山ゆかば草むす屍大君のえにこそ死なめのどには死なじ、是なん臣道ならん」と、支那思想の影響を受けて居ない往古の思想にかえたのであらう。

# 日本武士道と西洋武士道

文学博士 高 木 武

日本の武士道と西洋の武士道とを比較して、いずれに長所があり、短所があるかを研究された文学博士高木武氏は、著書に「東西武士道の比較」という名著がある。本篇はその要録を学会に於ける講演の筆記によるものであるが、克明に研究された尊い記録であって、わが武士道発達の上に、是非とも味読すべき名編であると信ずる。

# 日本武士道と西洋武士道

文学博士 高木 武

## 一

個人に個性があるように、民族にもまた特殊なる性情がある。民族的特性は民族の生命であって、その興亡盛衰は、一に係って特性の如何に存すというも不可ではない。ローマはその特性を發揮して興り、その特性を失うて亡びた。埃及、印度、波蘭等は、その特性劣弱なるために憐れむべき境涯に沈淪し、我が国及び欧米列強が今日の隆運を來したのは、その特性の優秀なるに依るものと言わなければならない。

我が国の武士道は、取りも直さず、日本民族の特性に外ならない。我等の祖先が、我が国を擁護し、その發展を促して現代に及べる所以のもの、また我ら現代日本国民が、祖先の遺志を繼承して、我が国を空前の盛運に向わしめたる所以のものは、他にも種々の原因があると思われるが、主として、万邦に卓絶せる武士道精神の活用に歸せざるを得ないのである。

翻つて考えるに、西洋民族の間にも、シヴァリー即ち西洋武士道と称して、我が国の武士道と対照比較すべきものがあり、これまた西洋民族の精神的美化をなしているのである。しかし、西洋と日本とは、本来、風土を異にし、民族的性情が同じくないので、彼我の武士道の間にも、自ら相違のあるところが少くない。彼我の武士道の特性を比較することは、やがて、両民族の特性を比較する所以となるので、その異同長短を明かにし、我の長所は益々これを助長し、短所あらば他の長所を採って補い、尚現代世界の趨勢に應じて、巧みに之を適用したならば、我が国運の興隆を促し、民族の發展に資することが多大であらうと思う。

## 二

日本武士道は、一言にしていえば、日本民族の固有の性情に基づいて成り立ったものということが出来る。即ち、忠君愛国とか、祖先崇拜とか、尚武任侠とか、寛仁温和とか、清明潔白とか、現世的実際的とか、積極的進取的とかいうような事柄は、我が民族



に固有する性情で、しかも亦、武士道の主要成分をなしているのである。しかし又、我が固有思想は、古神道の要素となっているものが多いのであるから、武士道は、一面からいうと、神道にも根柢を有しているものといふことが出来る。かように武士道は、我が固有の性情に淵源しているけれども、時代の推移につれて、なお他の事情がいろいろ附加して、愈々大成の域に達し、益々優秀善美なる特色を發揮しているのである。この附加せられた事情とは、民族精神の内的發展の側からいえば、外来思想、即ち儒教や仏教思想の包含化であるが、その外的發展の側からいえば、武士の使命が齎らせる境遇上の感化である。

儒教や仏教は、もと支那や印度に発生したものであるから、我が国情、我が民族の性情に適應しない部分も少くないのであるが、同化性の強烈なる我が民族は、巧みにそれを取捨選択し、捨つべきを捨て、採るべきを採って、固有性情に同化し、その内容を豊富にしている。

武士の使命は君国を擁護することを眼目としているが、擁護の職責を果さんが為には、君国に仇する敵と戦うて、勝利を得なければならぬ。随つて武士は優秀なる戦闘者の資格を養成すべき必要に迫られ、心身の修養、武術の鍛錬に工夫を凝らす様になった。その結果として、鉄のように頑強なる身体、生死に臨んでなお従容たる胆力、快刀乱麻を断つる決断力、岩をも透す強烈なる意力、百折不撓の忍耐力、一髪危機をも見逃さぬ鋭敏なる觀察力、勤勉力行の習慣、絶妙なる武術等は、遺憾なく養成せられ、また国体的行動を取る必要から、服従及び共同の習慣、礼儀を重んずる心、等を涵育し、遂に武士道の光彩ある發達を促すに至った。

西洋武士道も、その民族（主としてゲルマン民族）に固有なる、尚武的の性情に萌しているのであるが、彼ら民族の勇氣は、本来、粗剛であつたので、これを理想化する必要が起り、茲に始めて西洋武士道の端を發しているようである。しかして、粗剛なる武士の風尚を理想化したものは、神聖なるキリスト教であつた。けれどもキリスト教の勢力は絶大無辺であつたので、何時しか主客傾倒し、武士はキリスト教を擁護することを以て任とし、その使命のために優秀なる戦闘者を養成すべき必要に迫られ、心身の修養や武術の鍛錬に工夫を凝らし、自然に武士道の發達を促すに至った。

西洋武士道で、キリスト教が武士道を理想化したのは、我が国の武士道に、儒教や仏教が影響を与えたのに似ているけれども、我に於ては、武士道を主にして、寧ろ儒仏二教を同化したるに反して、彼に於ては、キリスト教を主にして、武士道は、その方便として感化使役せられたるの觀があるのである。即ちこの点に於て、彼我その位置を傾倒している。それで我が武士道は、西洋武



士道に比すれば、一そう国家的傾向を有し、民族的性情との契合もまた深刻であつて、国家及び国民に対して、頗る重要な關係に立っているのである。

### 三

我が国では封建制度以前、群雄割拠の姿であつたから、一国一城の主は自衛のために、戦うて武力を強大にせんとし、多数の武士を養ひ、団体としては軍紀を振張り、個人としては心身を修養鍛錬し、あくまで戦士としての資格を優秀ならしめんと心掛けた。ここに於て武士道は非常なる發展を遂げたのである。

西洋の封建制度には二通りあつて、一を主藩制、他を従藩制という。主藩制とは大諸侯が、中央政府に対して独立の態度を取り、その領地を自由に治めたのであり、従藩制とは、小諸侯が大諸侯の前に跪いて、その身及び領地を保護せんことを希ひ、大諸侯と従属の關係に立っているものをいう。しかして封建時代の諸侯は、武士たる必要はなかつたので、当時の諸侯、殊に従藩の小諸侯は、武士に加入するものが少なかつた。また如何なる範圍の人も、武士に加入することが出来るので、藩臣であるということは、武士たる要件にならず、随つて西洋武士道と封建制度とは、余り關係が深くなかつたのである。

西洋武士道では武勇を以て武士道の主徳とし、これに、忠義、寛仁、良智、礼儀、名譽等の諸徳を随従せしめ、称して武士道の六徳といい、これを律するに正義の觀念を以てしている。しかしてこれらの徳目は、日本武士道でも重んぜらるるところであるけれども、その徳目の取扱方に、やや軽重の差があり、徳目の対象、及びそれが含んでいる觀念にも、また多少の異同がある。

我が武士道で首位を占めているのは忠義であるが、これは彼に於ては第二位に置かれている。のみならず、忠義という觀念も、彼我の間に趣を異にしている。我に於ては、忠義ということは、君主に対して己れを没して至誠を尽す行為を称し、彼に於ては主としてキリスト教の為に力を尽すことを言っている。我に於ては忠ということとは孝と共に考えられ、君に忠を尽すは、やがて親に孝を尽す所以となり、いわゆる忠孝一本ということになるけれども、西洋の方では、かかることはない。良智は、西洋では主要なる徳の一であるけれども、我に於ては彼に於けるほど重きを置いていない。これは我が民族の精神活動は情意を主としているが為と思われる。礼儀ということについても、我は端正なる容儀を修め、身体の諸官能を整え、その身をよくして、靈能を修練するこ

とに意を用いているが、彼に於ては、主として宗教的莊嚴の氣分を深からしめん為に礼儀を重んじているようである。又、名譽ということも、我に於ては、祖先崇拜の性情からして、非常に家名を重んじているが、彼は、社会組織を異にしているので、かような傾向はない。以上の外、我が国では、信義、質素、廉潔などという徳目をも、重要なものとしている。

#### 四

西洋武士道はキリスト教的軍制で、その目的は、地上に神の王国を恢拓するということにあったので、これを律するに十条の法を制定し、武士の帰趨することばを明かにしているが、十条の士法とは次のようなものである。

第一条 キリスト教を信じ、その道を守ること。

第二条 キリスト教を擁護すること。

第三条 弱者を扶け擁護すること。

第四条 祖国を愛すること。

第五条 敵を見て退くべからざること。

第六条 異教徒と殊死して戦うべきこと。

第七条 神の道に背かざる限りは、封建制度の道を守ること。

第八条 虚言を吐かずして然諾を重んずること。

第九条 寛仁にして衆を恵むこと。

第十条 正義正道を守り、罪惡と戦うべきこと。

我が武士道では、彼に見るような公共的士法は制定せられていない。多くは、学者又は武將が武士を教養せんが為に作った著書、家訓、家法、士規、壁書等に、武士の本分を説き心得を示し、以てその行動を律すべき標準を示している。しかしてその委曲は人によって必ずしも同じくはないけれども、その趣意は、殆ど轍を一にしている。今、それらに提説せられた趣意を適當なる条文として示せば次のようである。

- 一、主君に忠義を尽すべし。
- 一、正義を標準として行動すべし。
- 一、武勇を重んずべし。
- 一、名誉を重んずべし。
- 一、仁愛の心あるべし。
- 一、礼儀を正しくすべし。
- 一、質素を旨とすべし。
- 一、節儉を重んずべし。
- 一、廉潔なるべし。
- 一、親には孝順、兄弟には友悌なるべし。
- 一、克己自制して忍耐の徳を養うべし。
- 一、皇国を愛護すべし。
- 一、学問に心掛くべし。
- 一、武術を鍛錬すべし。
- 一、神仏を崇敬すべし。
- 一、心胆を練り士気を養うべし。
- 一、度量を宏大にすべし。
- 一、武士の職分を自覚して奮励すべし。

これを西洋の士法と比較するに、彼は民族的宗教的臭味を帯びて公共的であるが、我は国家的、家族的、修養的色彩が濃厚である。

## 五

西洋武士道はキリスト教的軍制であるので、宗教によって醸成せられ、宗教によって支配せられ、宗教によって使役せられ、宗教の為に尽すのをその本分とし、宗教を離れて武士道なく、武士道と宗教とは、合一不離にして、武士道の命運は、一に宗教によって始終している。武士道が宗教と関係があるというよりも、武士道は宗教の一分身という姿になっている。

我が武士道も、宗教との関係は少くないのであるけれども、寧ろ宗教を支配し、これを利用し、自己の発展に供している。神道の思想は、武士道の淵源となっていて、武士道と関係があることは勿論であるが、武士道発達の過程に於て、最も武士道と密接なる関係をもっているものは仏教である。しかして仏教の数ある宗派の中でも、殊に多大なる影響を与えたのは禅宗である。一体、禅の教義というものは、文字に拘泥することなく、簡單直截にして物事に執着せず、瀟洒淡泊にして、繁褥なる虚飾を去り、依頼心を排して、瞑想黙思、大悟徹底、身力特行、安心不動、よく大勇猛心を發揮せしむる特長があるので、武士の好尚と吻合し、武士の志操を教養し、武士道の発達に資したことが少くない。随って、古来、名ある武士にして、禅に参じ、工夫弁道して心胆を練り、潜勢力を涵養したものが非常に多いのである。

真宗は、信心以外、一切の形式を打破し、肉食妻帯をも禁ずることなく、念仏称名を以て成仏の手段とする通俗易行であるから、武士で之を信ずる者も多かったようである。しかして、その主張する報恩の觀念は、武士が主君に対して一身一家を捧げ、恩義に報ゆる忠誠と符合し、武士道に資するところが少くなかった。日蓮宗が立正安国を標榜して、国家主義的色彩を帯び、我が国民思想に吻合するところがあり、勇壮にして武人の好尚に通ずるところがあったので、これまた武人の間の信者が多く、武士道の発達を促したことも少くなかった。

しかし之等の仏教は、武士道の発達に資したる滋養剤に過ぎず、武士道は主的地位に立って、宗教を利用したものに外ならぬのである。それで宗教の關係からいうと、我は宗教に対して主的關係に立ち、宗教を支配し、これを使役しているのに、彼は宗教に対して従属的地位に居り、宗教に支配せられ使役せられ、その命脈を宗教に扼せられ、全く正反対なる事情の下にあるのである。



## 六

西洋武士道では、男子が七歳に達すると、これに家庭教育を授けたが、家庭教育は宗教教育と徳育とを専らとした。やがて十五歳の頃になると、父母の家を出でて他の武士の家に見習に入り、真の武士の生涯を営み始めるのであるが、これを花公子といっている。花公子は丁年に達すると、武装式という莊重たる儀式の下に武士の団体に加入し、始めて一人前の武士となる。しかして武士となるには階級に何等の制限がなかったので、何人と雖も武士の団体に加入することが出来たのである。

我が国では、武士となるには、武士の家に生れたものに限られていたが、武士の教育は、家庭教育と武將の教育との両面に分つことが出来、教育の内容から見ると、精神の修養と、身体技術の鍛錬とに分つことが出来る。そしてこれは何れも峻厳なものであった。武士の教育には、儒教の教義を配することが少くなかったので、武士は一面に於て、武事を修練すると同時に、學問に志し、人倫の道を解し、品性を高め、氣範を養い、人格を高め、戰士としての優秀なる資格を具備すると同時に、人物としても優秀なる資格を具備していた。

西洋武士の教育は、宗教的典礼的で華奢、我が武士教育は、家族的修練的で質素、彼は感情を重んじ、比較的に學問に暗く、武人としての教養を主としているが、我は意志を重んじ、比較的に學問に力を注ぎ、武人としてのみならず、紳士としてふさわしい品格力量を具備せんことを力めた。

## 七

武士道は、武士社会を律する峻厳なる道義である。随つて、武士にして、若し義務を怠るか、その対面を傷くるようなことがあると、相当なる制裁を加えたのである。我に於ては、武士に刑罰を加うるに当つても、つとめてその名誉を尊重し、極めて破廉恥なる罪を犯すとか、又は、許し難い罪惡を犯した場合の外は、一命を奪うにしても、切腹の制を設けて、その名誉を尊重した。武士にして切腹を課せらるるは、他の刑罰を課せらるるよりも遙に名誉であった。また敵討も切腹と相待つて、我が国に特有なる制度である。封建時代に於ては、刑法の設備が十分でなかったので、殺戮せらるるようなことがあると、被害者の親近者が仇敵を討滅することによって、社会の秩序を保持したのである。即ち仇敵は我が君父を殺害したものであるから、我は天に代わつて、これ

を討滅する。それで、君父の仇を報ずるのは、君父に忠孝な所以であると解釈し、正義の観念を満足したのである。

西洋武士道に於ても制裁は緩慢ではなかった。武士にして本分に背ける行為があると、武士の団体から除名放逐した。しかしこの際は、公衆の面前で侮辱を加え、その武装を解除して放逐することになっていた。

## 八

我が国の武士は、戦そのものを名誉とし、一騎打の格闘に手柄を立てんことを心掛けたので、扮装なども成るべく目につき易いように、きらびやかな色彩形装を選んだのである。鎧、直垂、弓、矢、太刀、槍、馬具に至るまで、形装色彩が多様で、実用上のみならず、外観の上にも、頗る意匠を凝した。又、武器を愛好したが、就中、刀剣は武器の至粹として、武士の魂を以て擬せられ、破邪斬魔、仇討討滅、自家防衛の具とし、これが良用を心掛けた。それで刀匠がこれを作るに当っても、単なる武器としないで、実一種の美術品として製作し、刀匠は単なる工人ではなく、靈腕ある美術家であった。彼らが刀剣の製作に従事するや、精進潔斎し、満身の心血を傾倒し、その精魂氣魄を鍊鉄に吹込み、鍛鍊幾十日の労苦を経て、始めて出来上ったものであるから、日本刀が神威を蔵し、靈氣を帯ぶるは当然である。

泰西武士の扮装にも、固より装飾がないではないが、彼等は、外観よりも実用を重んじた。色彩形装の如きも決して我が国のそれのように華かでなく、甲冑、弓、矢、剣、戟のようなものでも、簡単に軽便実用を旨とした。又、武士が武器に対する愛好も、我が国の武士のようではなく、刀剣の如きも、一個の武器たるに過ぎず、刀匠は一個の工人たるに外ならなかった。

## 九

武士は身命を捨てて戦闘に従事すべきものであるから、剛健勇邁にして、困苦に堪え、窮乏を忍び、克己自制して、心身の鍛練を心掛け、随って女性に溺るれば、自ら情弱の弊を醸すというところから、女性に心奪われるという弊がないように力めた。

女子は独立の権能を失し、戦争に役立たないところから、自然、男子の権勢が増大し、女子は男子のために、殆ど絶対的の服従を要求せられ、女子も亦、甘んじて良人の為に、満身の心血を捧げ、その任務を全うせんことを努めた。日本婦人は従順であった

けれども、その心事は極めて壮烈で、如何なる困難をも忍び、誘惑にも打勝ち、万一の場合には、身命を棄てて、壮烈なる働をした。

泰西に於ては、婦人の地位は甚だ高く、男子と同等に交際し、何事も積極的でややお転婆の傾向があった。又、武士の方でも弱きを助け、強気を挫くという觀念から、婦人を尊び、これを保護するのを任としたので、貴婦人は社会的に非常なる勢力を有し、大抵の武士は、自分の崇拜する婦人を定め、その者の標章となるべき手袋または手巾の如きものを、甲冑または楯などにつけて戦闘に従事するを常としたのである。試合等に於ても、婦人は自ら最前にする武士の為に応援し、その勝利を熱心に希い、若し武士が勝利を得ると、自らこれに褒賞を授けた。その他、恋愛に対しても頗る自由の態度を採り、これを拘束することが少なかったのである。それで、婦人の社会的地位及び武士道と婦人との関係の如きは、我と彼と正反対になっているのである。

## 一〇

管見によると、我が武士道の長所は、

感激的直覺的なること。

公明正大なること。

心身を鍛練して剛強ならしむること。

没我献身的なること。

自信自重の風あること。

現世的実行的なること。

学問修養に心掛け、識見品格を高めしこと。

等であり、その短所は、

階級的因襲的なること。

権利思想に乏しいこと。

智的観念に乏しいこと。

公共心に乏しいこと。

精神を過重し、物質を閑却せしこと。

等であるように思われる。又、泰西武士道の長所は、

信仰的にして敬虔の念厚きこと。

公明正大なること。

心身を鍛練して剛強ならしむること。

義務的観念強きこと。

秩序規律を重んずること。

等で、その短所は、

宗教に隷属支配せられしこと。

学問の素養乏しかりしこと。

形式に拘泥せしこと。

過度に婦人を尊崇せしこと。

等であるようである。しかし、これらの事項については、比較評論を試みたいのであるが、今は略する。

## 一一

我が国の武士は、四民の上位を占めて、自ら標榜することが高く、一世の儀範として、衆庶を指導したのである。それ故に武士は、社会道義の建設者にして、又その維持者であった。しかして社会は、万衆の集団にして、武士は、その中堅となっていたので、武士気質は何時しか平民社会にも及んで、衆庶を感化したのである。明治維新と共に、封建制度は破壊せられ、武士の階級が、その実を失い、四民平等の聖代となつてから、武士は民間に入つて庶民と共に凡百の職業に従事し、武士道の精神を世に普及し、ま



た国民皆兵の制度によって、我が国民は悉く兵役の義務を負い、軍籍に身を置くこととなったので、従来に於ける武士道の嫡子は、軍隊に継承し、いままなお昔のように、我が軍人は心身の鍛練、技術の錬磨に力を尽し、君国の擁護に任じている。我が軍が、日清日露の戦役及び日独戦争に於て、連戦連勝、向うところ敵なく、驚天動地の壮烈なる活劇を演じ、絶倫の武威を示し、至大の功績を挙げ、世界の耳目を聳動せしめたる所以のものは、固より他にも原因があるけれども、主として、この武士道精神が発露し活躍した結果であろう。

## 一二

十九世紀の初期からその末に到るまで、国家的競争の雰囲気は、殆ど欧州大陸に限られたかの觀があつたけれども、二十世紀に入ってから、東洋にも波及し、世界は頗る多事となった。我が国は東洋の孤島として存立しているので、過去に於ては、国家的競争の大渦中には存在しなかつたけれども、今や世界一等国の班に列し、世界的競争の大渦中に投じ、万国を相手に競争しなければならぬ立場にある。しかしてこの難局に処するには、最もよく時勢に適應すると共に、最もよく我が国家の存立に都合のよい資格を具備せしめ、物質的实力と精神的實力とを調和充実せしめ、平和の時代にも戦争の時代にも後れを取らないように、教養鍛鍊して置かなければならぬ。武士道は過去の日本が生んだ最も有為健全なる天恵の寵児で、その精神は万代不易の鉄律として、我が国民の活動を支配すべきものである。武士道の形式方面は、固より封建制度の廃滅と運命を共にすべきものである。切腹とか仇討とかいうようなものは之に属する。けれどもその精神に至っては、どこまでも保存してこれを採用しなければならぬ。我等は凡百の事実にすべて武士道的精神氣魄を応用し、国運の興隆、国民の発展を促さなければならぬ。武士道精神の充実発展は、日本民族の自我実現である。我が国家民族をして、適者たり、優者たらしむに就いて、吾人は、是非とも武士道精神の氣魄と品格と實力とを以て、奮励努力しなければならぬ。